

ブラジルの馬鈴しょ事情

国際協力事業団委嘱ブラジル野菜研究プロジェクト専門家 秋元 喜弘

こちらへ来てから3カ月が経ちました。はじめのうちは異邦人にかこまれた仕事をしたり話をしたりするのがおそろしく、またわずらわしく感ずることもありましたが、いまではごくあたりまえになり、果して自分はいまブラジルにいるのだろうか、と思うほどになりました。夏真とはいえ最高気温が30度をこすことはほとんどなく、夜は涼しく、私が長年すごした札幌あるいは群馬県高冷地の夏によく似て快適です(第1表)。

食事でもミソ・ショウユなど日本食の材料を売っている店がありますのでそれほどの不自由はしません。ブラジル人の主食はパンではなく米で、多くの家庭レストランでも朝以外

は米食がふつうです。といっても日本の米のように丸くて粘りのあるものでなく、長形でパラパラとしており、ブラジル人の多くは米に油・塩などを入れて調理し、それにフエイジョンというインゲンマメに似た豆を塩味で煮てかけて食べています。馬鈴しょはトマト・タマネギとともにもっとも重要な野菜で(第2表)、スーパーなどでもこれらは他の野菜とは別に山積みにして売られています。馬鈴しょはマツシュにして他の野菜類をまぜ、サラダのようにして食べることが多く、日本のようにいもの形をとどめたサラダにはお目にかかりません。

そのほか大きく切って油で焼いたもの、フ

〔第1表〕ブラジル主要都市の気象

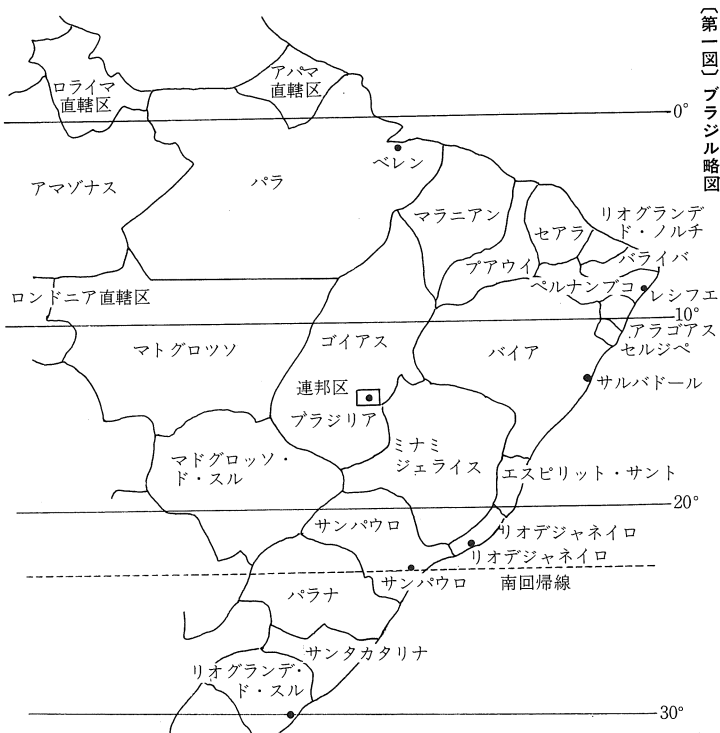
(℃、%、mm)

都市名	項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均全
ブラジリア	最高気温	26.5	27.0	29.4	26.7	25.4	25.4	26.7	29.6	28.3	28.1	27.2	26.8	27.2
	最低気温	17.2	17.5	17.6	17.1	13.9	14.3	13.1	14.7	16.5	17.0	17.5	17.4	16.1
	平均気温	20.7	21.4	22.7	21.0	18.9	19.0	19.2	21.8	33.5	22.0	21.8	21.2	21.1
	湿度	80	72	65	75	69	68	51	44	59	64	79	79	
	降水量	254.3	78.5	118.6	127.5	13.5	38.0	0.0	14.2	34.4	149.5	163.2	230.6	1,222.3
リオ・デ・ジャネイロ	最高気温	36.8	34.0	33.2	33.6	31.4	30.1	29.8	31.8	34.8	31.7	31.6	35.5	32.8
	最低気温	19.0	20.2	19.9	19.0	17.8	16.6	15.1	13.8	17.4	16.0	19.6	18.3	17.7
	平均気温													
	湿度	75	78	77	77	80	78	80	80	80	80	80	80	
	降水量	57.6	139.6	113.6	75.1	264.1	73.2	70.7	117.8	77.0	197.5	126.7	170.6	1,483.5
ポルトアレグレ	最高気温	29.3	30.2	25.9	23.8	19.1	18.6	18.3	20.1	21.0	23.4	25.4	27.7	23.5
	最低気温	18.7	20.7	18.3	15.5	11.7	8.6	9.5	13.5	11.6	15.9	16.4	19.2	14.9
	平均気温	23.2	24.4	21.6	18.6	14.9	12.4	13.5	16.2	15.8	19.1	20.4	22.9	18.5
	湿度	63	73	75	81	79	80	79	83	74	82	71	75	
	降水量	27.5	91.4	61.4	184.4	140.6	58.4	134.4	102.9	107.3	58.6	113.9	128.6	1,209.4
(比) 旭川	平均気温	-8.9	-7.9	-3.3	4.1	10.9	16.0	20.3	21.1	15.4	8.6	1.3	-5.1	6.0
	降水量	82	61	56	61	78	75	125	144	136	109	118	101	1,144.0
(比) 長崎	平均気温	6.4	7.6	10.2	14.7	18.5	21.9	26.3	27.4	23.9	18.6	13.9	9.0	16.5
	降水量	70	83	116	182	207	294	288	189	253	106	83	87	1,957.0

野菜の種類	1980年	1981	1982	1983	1984	1985
ト マ ト	767.9	722.6	821.5	810.1	897.5	866.8
馬 鈴 しょ *	635.8	678.6	872.7	658.0	829.8	793.4
キャベツ	259.4	240.8	262.1	235.2	317.3	276.4
タマネギ *	230.2	255.2	244.4	262.6	311.4	257.5
スイカ	193.2	228.0	266.5	220.4	268.8	245.5
ハヤトウリ	186.5	197.5	225.4	202.5	188.1	208.5
ニンジン	156.4	153.6	188.2	198.0	217.8	223.1
カボチャ	128.1	146.8	160.6	148.2	177.8	164.4
甘 しょ	85.0	78.9	102.2	98.0	109.3	123.9
レタス	81.8	73.8	73.2	71.7	42.7	68.6
ピーマン	77.4	74.5	86.4	79.1	115.2	86.6
キュウリ	73.0	66.8	87.1	82.2	101.2	82.0
トウモロコシ **	61.5	51.2	89.2	81.5	80.0	78.6
メロン	54.7	55.3	74.6	67.8	70.2	55.1
サヤインゲン	50.5	50.6	61.1	55.5	60.9	49.0
小型カボチャ	42.8	48.4	53.7	52.8	72.4	62.2
食用ビート	42.0	40.4	49.7	45.6	63.9	65.8
サトイモ	40.5	37.8	44.9	49.0	41.8	53.6
オクラ	31.1	26.8	39.3	30.9	36.9	28.6
コウビ ***	25.0	25.8	22.7	20.2	20.9	18.3
ニンニク(輸入)	16.4	7.9	7.9	5.4	12.6	11.8
ニンニク(国産)	3.7	5.0	5.1	6.3	8.0	7.7
計	3,242.9	3,266.3	3,838.5	3,481.0	4,044.5	3,827.4

〔第二表〕ブラジルの青果市場でとりあつかわれた主要野菜の数量

(1,000トン)



レンチフライのように細く切って揚げたものなども肉のつけあわせとしてよく出されます。

まだ他地方を旅行しておりませんが、くだしいことはわかりませんが、当地での見聞をもとにしてブラジルの馬鈴しょ事情についてすこし述べてみたいと思います。

1 概 況

ブラジルの馬鈴しょのほとんどは南部のサンパウロ・パラナ・サンタカタリナ・リオグランデスルなどの各州とミナスジェライス

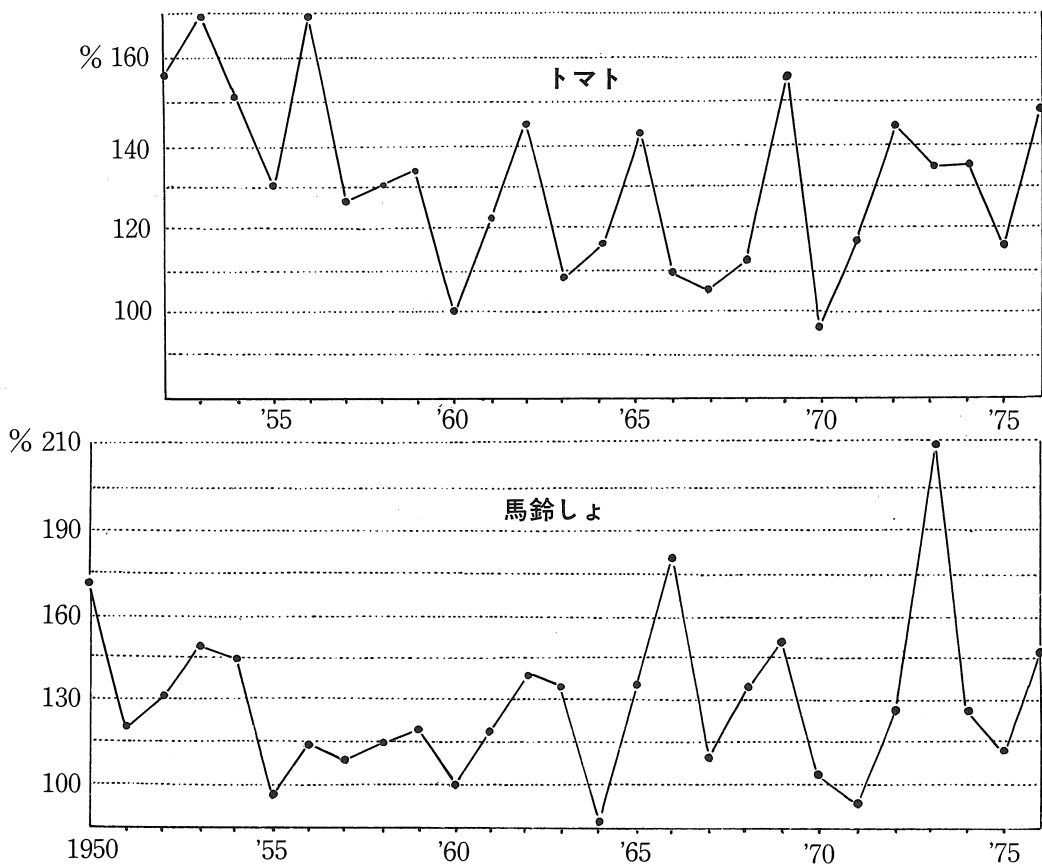
州の南部で生産されており、これらの地方は以前から人口密度が高く馬鈴しょの需要も多かったところです。

栽培面積は年間約20万ヘクタールで総生産量は200万トン、ヘクタールあたり生産量は10トンですが単位面積あたり収量は地域によって差があり、サンパウロでは16.7トン、つづいてミナスジェライスとパラナがそれぞれ14トンと11トン、リオグランデスルは栽培面積は広いのですが5トンをわずかに上まわる程度です。

パライバ・バイア・ゴイアスの各州と連邦

〔第2図〕 サンパウロ市場におけるトマトおよび馬鈴しょ価格の変動状況

(1960年基準、コチア産業組合調)



区（第1図）では地域により雨季の降水量が少なく気温も低いところがありますので、これら地方で馬鈴しょが生産される可能性は十分にあります。ブラジルでは北部にゆくにしたがって雨季と乾季との差がはっきりしており、ブラジリアでは5月から9ないし10月までが乾季でほとんど雨が降りませんが、かんがい設備があればこの期間でも栽培ができ、むしろ病害の発生がほとんどないために生産は容易とのことです。したがってこれからはこれらの地域での馬鈴しょ生産の増加が期待されています。

ちなみにブラジリアは建設されてから30年たらずですが、全くの無人地帯に人工的につくられた政治都市であり、産業のない完全な消費地で食料・日用雑貨など生活用品をはじめその他の物資・資材などは一切他よりの輸送にたよっています。野菜と一部の果物は例外で周辺では都市建設がはじまるに先立ってこの地に野菜を供給する農家が移住し、各種の野菜が生産されるようになりました。

農家の規模はだいたい4、5ヘクタールから50ヘクタールくらいまでですが、ほとんどは農繁期に多数の現地人をやとって営農をしており、日本のように自家労力だけのところはありません。ここでの作目は馬鈴しょ・ニンジン・ニンニクなどが多く、とくにニンジンは青果用のほか採種がかなりの面積で行われています。

馬鈴しょは種いもを他地域から購入しています。ブラジルでは馬鈴しょのことをバタタ（a batata）といい、これを生産する農家をバタテイロとよんでいます。これには農家であるとともに一種の企業家のような意味もあり、種いも・肥料・農薬など営農資材を銀

行からの融資を得て購入しますが、馬鈴しょは年により生産量に大差があり（これは病害虫その他の障害で生産が減るのでなく、栽培面積が年により大きく変動するためのもので、生産過剰ともなれば価格は暴落し（第2図）、バタテイロは借金の返済もできないくらいの苦境に立たされることも多いようですが、その反面うまく当てれば大もうけできるとのことでした。

私どもは日本で汗を流していかんして能率よく馬鈴しょを生産するかに苦労したものでしたが、その馬鈴しょがここで投機作物としてあつかわれていることは、いささかさびしい感がないではありません。いまブラジルはインフレが激しいいきおいで進行しており商店では価格のつけかえにいがしく、この3カ月のうちに2倍になったものもかなりあり、たとえば日本への航空郵便が私が到着した62年11月に50クルザードであったものが60、75となりいま（63年2月下旬現在）で90クルザードとなっています。その割に農産物の価格は上昇せず一般消費生活者は助かってはいますが、農家の生活はますます苦しくなりつつあります。ブラジル農業に必要なことは生産増加もさることながら、農家の生産意欲をもりたてる農業政策のような気がします。

さきに述べたようにブラジルの気象は乾季と雨季とにはっきりわけられますが、この傾向は北部にゆくにしたがってとくに明瞭で、南部では乾季にもかなり雨が降ることもありまた乾季でもかんがいの設備さえあればこれによって栽培が可能です。馬鈴しょ栽培を制限する気象要因は南部における冬季の霜と真夏の高温であり、この時期をさければ強い萌

芽力をもつ種いもさえ入手できれば栽培はいつでも可能なわけです。中央高原地帯は冬にごくまれに霜がくることもあるそうですが、ほとんど気象的な障害はないので周年栽培は可能と思われます。

しかし南部のサンパウロ・パラナなどの州が、かつては肥沃であり施肥をしなくても十分な収穫をあげられたのに反して中央高原のセラード地帯は極端にやせており、肥料を十分に施さなければ全く生産の見込みはありません。

北部の赤道をはさんだ熱帯雨林地帯は、あまりにも高温多湿のため、いまのところ馬鈴しょの生産はおこなわれておりません。

熱帯・亜熱帯のいも類としては甘しょのほかにキャツサバがあります。甘しょは、いもから萌芽育苗をさせないでつるを切って挿苗する方法が方法が広く行われています。キャツサバは現地名でマンジョカといい、でん粉原料作物ですが当地では根をゆでて食べています。

ほんのりとした甘味がありますが甘しょほどではなく、またそれほど粉質ではないのであきずに食べられます。

甘しょ・キャツサパともにブラジルでは広く栽培され、野菜というよりは食用作物として重要です。

なお余談ですが小さなかん木
がまばらにしか生えないセラー

ドのやせ地でもユーカリだけはおう盛に育つので政府は植林を奨励しています。

ユーカリは炭にして製鉄に用いられており、また戦後日本から渡航した篤農家によりこの樹種がしいたけ培養の原林として利用価値があることが発見されています。

サツマイモというと、いまでも戦中、戦後の食糧難時代を思い出す、という人が多い。「見ただけで胸がつかえる」と、嫌悪感を示す人もいる。国民を飢餓から守った救世主だが、イメージのうえで大きな犠牲を払った。

もちろん、理由はこれだけではなからうが、食用としてのサツマイモの人気はいまひとつぱっとしない。例えば、昨年全国で約百四十二万トン生産されたが、青果用は三割強にすぎない。あとは、大口のどんぶり用をはじめ、アルコー、飼料用などに回された。

いま日米農産物交渉で問題になっているでんぶんが自由化されると、産地は大きな打撃を受ける。なかでも、全国の生産量の四割を

サ
ツ
マ
イ
モ

占めるサツマイモの本場、鹿児島県は深刻だ。この危機をどう乗り切るか。平凡だが、最も確実な手だての一つは食用、青果用の需要を伸ばすことだ。サツマイモには、その可能性が十分にある。サツマイモは病虫害に比較的強く、農業や化学肥料が少なくてすむ。

カルシウム、ビタミン、繊維質が豊富な、すぐれた健康食品なのだ。食べず嫌いであまり知られていないのだが、実は、現代人の好みに合うようにと、品種改良も進んでいる。味が淡泊で、糖分の少ないイモもできている。

すでに、鹿児島県内ではでんぶんの自由化をにらんださまざまな

試みが始まっている。大隈半島では先ごろ、パロデーイ国家「からいも王国」の建国式があった。まゐり地元民自らがサツマイモのよさを見直し、地域振興策の柱にしていこうというわけだ。

県内のある農産加工組合では、サツマイモのペーストを主成分にしたアイスクリームを売り出した。サツマイモのフルコースを売りに物にしたレストランも現れた。試食したが、ゼリー、サラダ、シャーベット、ケーキなどすべてイモづくし、なかなか上品な味で粗食のイメージはない。

焼きイモだけでなく、いろんな食べ方があることを、国民の間にもう広めるか。この面で、政府も力を発揮すべきだと思う。(桂)

朝日新聞・昭和六三年四月一八日・夕刊「慈